

二月最後の土曜日に、大詰め理事会は予定通り行われた。春一番吹き荒れる中だったが、疾風に議事が飛ばされるようなハプニングもなく、また一步前進。入船氏の監事就任とともにメーリングリストも動き出すことになる。そして、その翌日は、寒さ逆戻り&再強風。天候に連動するかのように、怒涛のセッションが繰り広げられる。

ち「七曲全部仕上がれば、格好はつきそつだけど・・・」

「ご本番まであと六週間？　ギリギリかな」

ま「何を仰るパンマスさん。あと、じゃなくて、まだ、よ」

順調に仕上がっては来ているのだが、本気でライブを演ずるには、もうひと押し欲しいと考えているメンバーである。仮に十曲そろえば、アンコールの設定もできるし、何を隠そうフルアルバムだって夢じゃなくなってくる。千歳のメッセージソングはまだ音合わせしていないが、詞ができればいつでも。

詞が先行しているのもある。舞恵の原詩に曲が付けば九曲、つまりあと一曲となる。まだ六週間あると思えば、実現可能性は低くはない。

メンバーが集結しているのはいいとしても、全員が全員、本調子という訳でもなく、季節の変わり目のお疲れなんかもあって、「きまった！」っていうのが出ないのかもしれないが、限り。だが、スペシャルゲストは至って満足そう。彼女の笑顔に助けられ、本日のセッションは成り立っていると说着いていい。来てもらって本当に良かった。おまけに手土産までいただいて。

アツアツではないが、パンケーキは元気の素である。

「よし、初姉のお祝いの続き。気合い入れて行こう！」

マスターのかけ声で、難曲『*Phantasia*』の再演が始まる。リードボーカルは蒼葉。

「蒼葉さん、カッコイイなあ。でも、南実さんもステキ。入学祝いに買ってもらおっかな」
両親は運動オンチではないので、二人の娘もその気になればイイ線行く筈である。長女に限って言えば、これまでは親に反発していたので、スポーツの類もあえて避けていたフシはある。だが、晴れて進路が拓けたことで、それも解けてきていて、親譲りのいいところを見直す段階に入っていた。腕力と肺活量を鍛えればとりあえずいける。ことサックスに関して、音の良し悪しは温度と湿度見合いなので、その辺もバッチリ。あとは表現力、そして指の細かな動きといったところか。

南実の巧みな指遣いを見て、それが粒々を撰り分けるのと無縁ではないことを知る初音で

ある。すっかり魅了されてしまったようだ。

* * * * *

三寒四温を繰り返して、春は着実に近づいてくる。スギ花粉が本格的に飛散するシーズンも容赦なく迫ってくる。花粉症に悩まされる前に何とか一曲。これが千歳の当面の目標である。花粉に追われる曲作りというのは、何ともやりきれない面もあるが、発奮するには好材料と前向きに捉えることとし、在宅作業の合間を縫っては、desk top music DTMに明け暮れている。演奏順を想定すると、アンコール二曲目か。つまり締めくくりに相応しい曲……。

「石島姉妹、小松さん、奥様、そして皆様……」
女性ばっかしというのが気になるが、とにかく皆の笑顔を思い出しながら、リセット直後の情景なんかを重ね合わせている。

この新曲のおかげで、姫様とお会いするのもお預け中。今月は二十九日まであってちょっと得した気分になるも、その一日が逆にネックとなる。とにかくこのおまけの一日をフルに活用して仕上げてしまおう。そして出来たてを一番にお聴かせしよう。翌日の話だと言いつに、三月がやたら待ち遠しい。

南からの暖かな風が余計にソワソワさせてくれる。

(ふたたび、三月の巻 へ続く)

© renol ogger